



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「稚内市子育て運動における父親の学びと組織づくり : 地区別特性に注目して (その1)」
Author(s)	吉岡, 亜希子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 111, 129-150
Issue Date	2010-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.111.129
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/44654
Type	departmental bulletin paper
File Information	07Yoshioka.pdf



「稚内市子育て運動における父親の学びと組織づくり

— 地区別特性に注目して — (その1) 」

吉 岡 亜希子*

Learning Process and Organization of the Educational Movement on Raising Children in Wakkanai Area

— Focusing on the Characteristic of the Area —

Akiko YOSHIOKA

【目次】

- 1, はじめに～子育て協同と主体形成
- 2, 稚内市の子育て運動
 - 2-1 稚内子育て運動の歴史
 - 2-2 稚内市子育て運動の目的
 - 2-3 組織と活動の基本視点
 - 2-4 稚内子育て推進協議会組織図
 - 2-5 稚内子育て運動の展開
- 3, 地区別にみた子育て連絡協議会の特徴
 - 3-1 地区子育て連絡協議会—市街地4地区の概要
 - 3-1-1 南地区子育て連絡協議会
 - 3-1-2 北地区子育て連絡協議会
 - 3-1-3 東地区子育て連絡協議会
 - 3-1-4 潮見が丘地区子育て連絡協議会
- 4, 稚内市4地区における父親の学びと組織づくり
 - 4-1 南地区
 - 4-2 北地区
 - 4-3 東地区
 - 4-4 潮見が丘地区
- 5, 4地区の位置づけと父親の学びに関わる地区組織
- 6, まとめ

【キーワード】 子育て運動, 父親, 協同, 地域

* 北海道大学大学院教育学研究科博士後期課程

1, はじめに

子育て協同実践

子育て協同の実践は、60年代の共同保育所運動、70年代の学童保育所運動がその原点といえるだろう¹。これら父母と教員の協同のとりくみや、子ども会等の伝統的な地域組織などの活動、70年代の子どもと文化に関わる団体の活動などがあり、80年代後半からは、乳幼児をもつ母親たちによる子育てサークル、子育てサロン、子育てネットワークやNPOなどが多様な形で展開してきた²。これらを教育文化運動としてその歴史的展開をみるならば、自治体・学校などにたいする要求実現的な性格から、任意団体による遊び・文化活動や子どもの人権擁護、当事者のセルフヘルプと相互連帯のよりどころとなる居場所づくり、さらには多様なグループが連携する子育てネットワークへと、多彩なひろがりをもつようになってきた³。近年の父親による子育て協同実践の展開としては、80年代後半からその数を増やしている父親の子育てグループ（おやじの会等）や小学校を核にした地域づくりに挑戦する父親たちの実践、NPOを立ち上げ広域で父親検定を行うなどの実践を展開する父親団体などがあげられる⁴。

これらの展開は、同じ地域に住む者や同じ保育所、学校に通う子どもがいる親同士が共通の子育て課題を認識し、それらを乗り越えるために協同で取り組む実践と居住する地域を限定せず同じ問題意識をもつものがつながりあって成り立つ実践がある。実践主体に注目するならば、子育て協同実践の多くは母親や教師、子育て支援実践者が担っており、本論で焦点をあてる父親は、子育て協同の実践の中では、あまり位置づいてこなかった。しかし、母親の育児不安研究や現代的な子どもの育ちに関わる課題、特に子どもを育てる家族の生活困難と父親は切り離せない関係にある⁵。社会教育実践研究としても、父親の教育と学習に関わる分野は十分に検討されてこなかったといえるだろう。筆者はこのように子育ての主体としての位置づけが弱いが、実際にはその役割が大きい父親に注目し、特に子育て協同の実践主体として父親が変容していく道筋を明らかにすることを目指してきた。なぜならば、現代社会の子育ての根本的な課題は、個別化・孤立化の子育てにあると考えるからだ。母親だけの孤独な子育てを乗り越えるためには、協同の子育てが求められる。子育ての疎外状況を克服するために母親たちは、子育てサークル、子育てサロン、子育てネットワークと協同の子育てに取り組んできた。母親たちの子育て協同は、一定の役割を果たし、これからも必要な取り組みであるだろう。だが、現代社会の子育て課題は、母親だけの連帯では、乗り越えられない問題に直面している。それは、生活困難をはじめとした、親自身の困難である。経済のグローバル化が急速に展開する中、日本においても格差社会が深刻化している。これらの社会変化は、子どもを育てる親たちの生活を直撃し、子どもの育ちを母親だけでは守りきれない状況を生み出している。母親だけあるいは、一部の大人だけで子育てに関わる課題を解決することが一層困難な社会になっている。これまで子育て協同の実践主体として位置づけが弱かった父親だが、父親も親としての子育て課題を克服するために子育て協同の実践が必要であると考ええる。

筆者は特に父親の子育てグループを対象に、学習過程と意識変容を検討し、学び合いを通して親としての力をつける道筋を捉えようと試みてきた。母親が連帯によって子育て課題を克服しようと試みてきたように、父親にとっても連帯、協同活動が課題を乗り越える契機

となると考えたからである。その結果、グループ活動には「親睦型」と「協同型」⁶があり、また、乳幼児期だけではなく、思春期においても父親の子育て協同が果たす役割を確認し、乳幼児期から思春期までの縦軸という長い期間で父親の学びを捉える視点が必要であることが分かった。しかし、いずれも継続性という点で課題があり、父親の子育て協同実践としての広がりも有志による局地的な実践の域をでない事例が少なくないことが明らかになった。

現代的な子育て課題という点では、虐待をはじめとした子どもの育ちの困難、それらを招く要因ともなる子どもを育てる親の生活困難が深刻化しており、親への支援は緊急の地域課題といえる。これまでの子育て協同としての社会教育実践は、保育・子育て環境の整備や教育文化的価値の共有・創造、母親の育児不安への対応と、子どもの健やかな育ちの保障、あるいは、母親への支援としてその多くは展開してきた。しかし、親の生活困難が子どもの育ちを脅かす状況の中、保育所や学校、あるいは地域組織活動、一部の専門職による子どもと母親への限定的な子育て支援だけでは支えきれないのが現状だ。母親だけでなく父親も含めた上で地域の子育てに関わる組織・人材、をあらためて見つめ直し、地域の歴史や産業、そこで働く親の特性といった地区の特徴を捉え、地区ごとに子育て協同の組織づくり、人づくりという視点をもたなければ、子どもの育ちは守れない。つまり地区をベースに親をはじめとしたそこに住む者すべてを含めた子育て協同、学び合いという視点で捉えていかなければならない時代であると考ええる。それでは、ここでいう地区とは何か、どうとらえていけばよいのか。本論では、北海道稚内市で30年にわたり展開してきた子育て運動の中で特に地区別の展開に注目して父親を含めた形での組織づくり学び合いを分析する。稚内市の子育て運動は、中学校区ごとに組織づくりを行い、各地区独自の発展を遂げている。中でも市街地に位置する4地区は、一見すると父親を取り巻く諸条件が近いようにみえる。しかし、地域組織の展開や産業、歴史などが異なり、子育て協同や学習活動も独自の発展形態がみてとれた。父親たちの子育て協同実践を通した学びのありよう、組織づくりは、地区特性により異なっていた。父親の子育て支援とその学びを考える時、国家的な施策、自治体としての施策にとどまらず、自治体の中の地区特性を捉え、その中で展開する学習活動を分析し、そこに住む父親の実情にあった子育て協同組織をつくり、学び合いを保障することが求められる。本論では、4地区の父親を含めた組織づくりを追うことで地区特性に注目した子育て協同の意義を明らかにする。なお、本論で用いる「協同」は、自立した個人が自由意思にもとづいて、共通の関心事についての目的を実現するための活動を指す⁷。

社会教育における主体形成論

社会教育研究において、「親育ち」すなわち親としての主体形成へと展開する学習過程分析の蓄積がある（大部分は母親を対象とした分析であるが…）。親たちは孤立した子育てを乗り越えるために子育て協同活動を展開し、自らの子育て課題、地域の子育て課題にかかわる学習を積み上げ、一部ではあるものの地域を変革するための主体としての力量を獲得してきた。しかし、近年は親の自己責任論、子育て支援の市場化の問題、さらには格差社会の拡大、貧困問題など家族の生活そのものが脅かされ、親自身の生きづらさが深刻化している。せっかく築きあげてきた子育て協同という文化を継承していくことが非常に困難な時代を迎えている。筆者は、子育て協同活動として父親たちが積み上げてきた子育てグループ活動（おやじの会等）が、父親が親としての主体形成するための学び場であることや、活動を通し

た学習過程・意識変容について明らかにしてきた。しかし、保育所、幼稚園、学校などにおいて活動している父親グループの多くは、有志による組織であり、活動基盤は弱い。父親の子育てグループは、一部の父親のみが関わり、しかもわが子が園や学校を終えると関わりなくなるケースがほとんどである。活動に参加している父親は、協同活動の意義を実感しているものの担い手問題が大きな課題となっている。その要因の一つとして労働環境の悪化があげられるだろう。父親たちは、グループ活動を通し、子育ては母親だけ、あるいは家族だけで営むものではなく、人と人のつながり合いが不可欠な要素であることを認識しつつあるものの、労働環境の悪化により、子育て協同活動もままならなくなっているのが現状だ。一方、こういった子育てグループに関わることをない父親たちも、個別の子育てにおいては、父親の子育ての重要性を理解している。しかし、家庭内での子育て経験しかない場合、協同で子育てをすることの意味は、見えにくい。しかし、親だけで乗り越えられる子育て課題ばかりではない。地域全体の課題が子育てに大きな影響を及ぼすケースが後を立たない。例えばいじめの問題は、子どもだけあるいは家庭だけで解決することは難しい。地域の大人たちが協同することで、はじめて乗り越えられる課題である。不登校や虐待、家庭の生活困難の問題も、家族や一部の専門職だけで解決することは難しい。だがそのことに気づくためには、学びが不可欠である。それゆえ母親はもちろん、父親も親として学ぶための“場・活動”を安定的、継続的に保障する必要があると考える。国が施策として子育ては親・学校・地域連携だと唱えても、その必要性や意義を理解し、我がこととして行動に移すには、意義を確信するような学習が必要である。ゆえに自らが住む地域の子どもの課題を意識し、その課題を乗り越えるために自らも含めた地域の大人たち（子どもたち）が力をあわせて変革していこうという意識形成が現代社会における社会教育、特に主体形成論のひとつの課題であると考えらる⁸。

父親がある契機・学びによって子育ての意義を確信できたならば、こうした状況をつくりかえていくことになるのではないか。それはつまり父親の主体形成にほかならない。鈴木『主体形成の教育学』によれば、教育における主体形成とは「自己教育主体」形成であり、同時に教育実践者となっていく過程にほかならず、それは教育において何のために（教育目的）、何を（教育内容）、どのように（教育方法）を問い、それらを地域住民（子どもを含む）と教育専門労働者・関連労働者が集団的・組織的・自己規律的に「自己統治」していくことと定義している。現代社会において、問われなければならないのは、子どもたちの育ちに関わる問題を当事者はもちろんそのまわりの人々が共に学びあい、問題となっている社会をつくりかえていくための力、つまり主体的力量を形成する学びである。これらをすすめる学習を援助・組織化する実践過程を明らかにする必要がある。父親においてもまさに主体形成のための学習過程分析が必要なのである。

本論で取り上げる「子育て運動」を展開している稚内市は、日本最北の地であり、また過疎地域という自治体にとって厳しい条件におかれている。教育環境という点においても少子化による学校統廃合など現代的な課題を抱えている。その中にあって、自治体首長がリーダーシップを発揮しながら30年に及ぶ「子育て運動」を展開し、学校づくり、地域づくりの基盤に据えているのが稚内市なのである。稚内市では、父親も含めた形で子育て運動が展開している。必ずしもすべての父親が参画しているものではないが、乳幼児期から思春期までの親として学びが系統的に行われる組織づくりが展開している。教育はともすれば中央が

取り決めたことをどの地域でも同じように展開するよう求める。しかし、ひとつの自治体であっても地域ごとに伝統や特色があり、また、それぞれの地域組織のありようや住民の特徴がある。稚内市の場合、30年の子育て運動を中学校区という小さな単位で仕組みづくりを行ってきた⁹。中学校区によって、産業、経済状況をはじめ旧市街地、新興住宅地といった条件や住民の特徴など大きく異なっている。また、歴史的に展開している自治組織のありようもまた大きく異なっている。子育てに関わる組織もまた、それぞれの地区によって独自の展開がみられる。本論で特に注目する父親の子育ての学びや組織についても地区ごとによる独自の展開がみてとれる。

以上のように、本論の特色は、1. 子育て協同実践の側面から地区特性に注目した子育て協同の意義を明らかにすることと 2. 主体形成の側面から地区別特性に注目して、父親の学びと組織づくりを分析するところにある。

2. 稚内市の子育て運動

それでは、次に稚内市の子育て運動の概要を紹介する。この運動は広く知られている取り組みであるため、本論では現状について中心的に紹介したい。（初期の子育て運動については、横山幸一・坂本光男『宗谷の教育合意運動とは』、1990、坂本光男『子育て・教育を宗谷に学ぶ』、1990などいくつかの著書が出版されている）

2-1 稚内市「子育て運動」の歴史

稚内市は北海道の最北端に位置し、利尻礼文サロベツ国立公園を有する豊かな自然環境に恵まれた地域である。人口は約39000人。稚内の「子育て運動」が始まったのは1978年（昭和53年）である。水産業の母である稚内市は、当時200カイリ問題で打撃を受け、子どもたちにも少なからず影響が及んだ。最も顕著に現れたのは非行である。稚内市のみならず、全国的にも大きな課題としてクローズアップされる社会問題であったが、とりわけ深刻な事例として稚内市は知られることとなる。その対策のために結成したのが「非行問題懇談会」である。行政、市連P、子ども育成連絡協議会など19団体からなる組織で、これが「子育て運動」の始まりとなる。その後も非行問題があり、1984年に「稚内市子育て推進協議会」に衣替えし、この会が「子育て運動」を推進する基盤となって、現在に至っている。また、1983年の大韓航空機事件をきっかけに稚内市は『子育て平和都市宣言』を行い、平和を位置づけた子育て運動を展開している。この運動の大きな特徴は、町内会を重視し、PTAを活用してきた点である。2009年は、地域づくりに子育て運動が明確に位置づいた歴史的な年となった。2009年度から10年間にわたる市の計画である「稚内市第4次総合計画」に子育て運動が位置づけられたのだ。学校教育推進計画においても稚内の教育の基盤として子育て運動が明記されており、名実ともに稚内市のまちづくり・教育において「子育て運動」が柱となった。だが、稚内市における子育ての状況は、経済状況の悪化が子どもの育ちを直撃している。全市的に小中の就学援助が増加傾向にあり、およそ3割の家庭に及ぶ。一人親の家庭も少なくない状況で、経済環境の悪化は、親の労働条件を厳しいものになっている。子どもが健康的に安定的に過ごすことさえままならない家庭への支援が大きな課題として意識

されている。こうしたなか、子育て運動は現代社会の子育て課題の解決にどこまで迫ることができるのであろうか。（子育て推進協議会が行っている全市的な事業は、図表1の通りである。）

図表1 「稚内市子育て推進協議会主催 平成22年度事業計画」

1, 子育ての日事業「みんなおいでよ！親子ふれあいデー」5月
2, 沖縄戦慰霊の日（子育て平和の鐘・鐘打）6月
3, 第22回平和折り鶴祭り8月
4, 子育て平和の日記念式典9月
5, 第26回最北端平和マラソン9月
6, 第22回平和駅伝大会9月
7, 第10回愛と平和を考える子ども会議9月
8, 稚内市教育講演会11月
9, 第20回最北端元旦子育て平和の鐘 鐘打式1月
10, 全市子育て運動交流研修会2月
11, 平和学習資料の改善と活用
12, 子育て新聞「ぬくもり」発行
13, 子育て相談事業

2-2 稚内市子育て運動の目的

子育て推進協議会の文書において、子育て運動の目的をつぎのように記している。「①すべての子ども達のすこやかな成長のためには、授業がよく分かり、学校生活が生き生きと楽しく、その学校が地域社会に根付いていることと、明るく健康な家庭、思いやりと文化の香りのする平和で豊かな地域社会の存在が必要条件です。②市民ぐるみの子育て運動は、この条件を創り育てるために教師や学校、家庭や地域の人々が市民ぐるみで一致協力し、相互に作用し合って、それぞれの教育力を総合的に高め合うことを目的とする運動です」。このように学校生活の充実、家庭生活の充実、豊かな地域づくりを目指し、すべての住民が協力して子どもたちのために運動することが明記されている。

2-3 組織と活動の基本視点

- ①この運動の全市的取り組みの場面では、教育関係者、特に校長会・教頭会・市連P・市教委・支会が運動の心棒になる責任と自覚が求められます。
- ②中学校区単位の地区別の子育て運動の場面では、その地区の幼・小・中・高の教職員ぐるみとPTA父母ぐるみの体制が心棒となり、町内会・育成会の緊密な協力を基盤にした地域ぐるみの活動を大切にします。
- ③この運動の趣旨に賛同し、参加する全市的団体と中学校区を単位とする地区別子育て連絡協議会の相互の自主性を保障し合うことを前提とした相互協力と活動の創意工夫が重要です。

稚内市子育て推進協議会では、これらの基本視点を繰り返し文書で確認しあっている。
（組織図は、136 ページ 図表 2）

2-4 稚内市「子育て運動」の展開

恒吉の「地域子育て運動の展開構造 ―宗谷の合意運動への自己教育論的接近―」『北海道大学教育学部紀要 第 61 号』, 1992 では、子育て運動の発展段階を次のようにまとめている。「教組主導による啓蒙的な活動, 教育機会の整備から, 南地区にみられる地区 PTA によって父母が町内会単位で組織され, 組織の中で自分たちにあった運営方法に創造・改善していくこととなる。それは「お茶の間懇談会」を通じての相互教育の場を待つしかなかった。この親同士での相互教育の場ができてはじめて啓蒙的な活動や教育機会の整備が親の自己教育の条件になっていくのであった」。ここに示されているように 90 年代前半は, 南地区における地区 PTA の取り組みが成果をもたらし, 親同士の相互教育の意義が確認された。しかし, その後南地区で展開した地区 PTA は, 他地区に展開することはなかった。それは, 中学校区ごとに組織した「子育て連絡協議会」を支える地域組織や住民が地域によって異なり, 南地区とまったく同じかたちで展開することにはならなかったからである。父親の子育てに関わる学びを考える場合もこの視点は重要である。各地区の経済状況, 産業構造, 地域組織などを位置づけ, その地区にあった組織づくりを展開しなければ, 子育て協同, 生きた学び合いの定着・発展はのぞめない。

図表2 稚内市子育て推進協議会組織図



3、地区別にみた子育て連絡協議会の特徴

子育て推進協議会には、地区子育て連絡協議会が組織されており、7地区に分かれている。事務局を担当しているのが小中学校の校長である。7つの地域ごとに特色があり、その展開も異なっている。全市で行っている子育て運動ではあるが、それぞれの地域事情が異なるため展開過程にも違いがある。以下、2008年12月から行っている稚内市子育て運動・共同調査で明らかになった各地区の特徴と現状を述べていく。7地区に分かれているが、本論では、特に市街地である南地区、北地区、東地区、潮見が丘地区を取り上げる。この4地区は市街地という位置づけとなっており、この地区以外の宗谷地区、西地区、天北線地区は農漁村地区となっている。本論では、さしあたり市街地4地区に焦点化し、それぞれの展開過程をみていくこととする。なぜならば、現代社会において都市部での子育て協同が難しくなっているという現状があるためである。農漁村地域は、市街地とは異なる独自の展開・課題があるため、稿をあらためて分析することとしたい。

3-1 地区子育て連絡協議会―市街地4地区の概要

3-1-1 南地区子育て連絡協議会（南中学校、南小学校、港小学校、15地区別PTA・町内会）

この地区の中学校の再生が全国的に注目され、子育て運動が広く知られることとなった（昭和50年代に起こった非行問題の克服）。子育て運動の基盤をつくったのが、南中学を中心とした、「南地区」であったといえる。南中ソーランが生まれ、全国に広がったことでも知られる地域である。学校のPTAだけでなく、町内会ごとに地区別のPTAも組織されている点が南地区連協の大きな特徴となっている。子育て運動の推進力としてPTA、特に地区別PTAの存在が大きく、学校と家だけでは見えない子どもの姿が地域にはいると見えてくること等が認識されてきた。平成4年には地区別PTAの意義をまとめたVTRがつくられ、地区別PTAの中には年に一度活動をまとめた冊子を発行する地区もあった（現在は発行していない）。南地区は、小中の交流はあるが、連携とまではいえない。教師同士の連携に加え、教師が地域の連携を組織できるかどうかは課題として意識されている。子育て運動における連携の最少単位は、町内単位の子育て連絡会である。ここが今弱まってきている。この連絡会が機能しないと南地区の子育て運動はうまくいかないと危惧する声もある。「上からではなく、連絡会からあがってくるような形でなければならない」と認識されている。子育て運動は30年の歴史がある。そのため運動が始まった頃に中学生だった子どもたちは親となり、PTAとして学校に関わっている。南中学校では、2009年に不登校生徒への対応を目的として「子育て（不登校）支援ネットワーク」が立ち上がっている。校長が呼びかけ、当事者、保護者、専門職、南中学校元職員などで構成されている。また、2010年春には、地区の3校の教員が集まり「南3校小中教育研究会」が発足している。小中連携、さらには小中一貫の教育課程づくりにむけて動きだしている。【特徴：ホタテはえなわ漁師町、稚内唯一の地区別PTA、PTA参加率高い、南中ソーラン発祥の地】

3-1-2 北地区子育て連絡協議会（稚内中学校、中央小学校、16町内会子育て連絡会）

この地区は旧市街地ということもあり、地域で学校を応援する力が大きい。歴史のある地

域のため学校に対する思いも強く、子どもや孫が卒業したあとも運動会のソーラン（演舞）を見にくる高齢者も多い。自営業を営む住民も多く、経済活動を通じたつながりがみられる地域でもある。町内会、育成部の活動も盛んな地域だが、近年の急激な少子化により活動の見直しを余儀なくされている。生徒支援ネットワークがあり、平成19年から実施している。校長が呼びかけて、13名で組織している（民生児童委員や教育委員会など）。学校だけでは子どもを支え切れない面があるため、具体的な事例に対応することを目指し組織したという。小中学校の学校間交流は長く行っており、保育所、幼稚園、小学校との連携もしている。毎年、中学生が小6児童へ運動会の案内を渡しに学校を訪問している。また、小学校に英語が導入されたことで中学校教師が指導に行くことや中学1年生の基礎学力をつける時間に小6当時の担任に来てもらうなど小中間の学習に関わる交流により、お互いのカリキュラムの見直しや授業方法を検討するなど、よりよい学校経営に生かされている。月に1度、校務分掌ごとの小中連携も行っている。学校評議委員会、PTA役員会を小中合同で行う日を設けるなど工夫している。小学校のPTA組織に地区委員を設け、父親を2名ずつ選出することが目指されている。地区委員による行事（雪中レク）や父親懇談会が毎年催されている。父親懇親会には、小学校の地区委員だけでなく中学校からも数名の父親が参加して交流を深めている。中学校のPTA役員の半数は父親である。父親の子育てに関わる活動は活発である。保育所、幼稚園、小学校、中学校の行事をすべて掲載している北地区カレンダーを作成し、PTAだけでなく地域住民にも配布し、参加を呼び掛けている。これは北地区連絡協議会独自の取り組みである。また、2006年には、北地区子育て連絡協議会が「北地区子ども生き生き宣言」を掲げ、地区レベルでの子育て運動を展開している。【特徴：旧市街地、住民と学校関わりが強い、保幼小連携、小中カリキュラム連携、父親によるPTA地区委員の活動が活発】

図表3 「稚内市北地区子ども生き生き宣言」

北地区の子どもたちをすこやかに育てよう

（『北地区子ども生き生き宣言』、北地区子育て連絡協議会、事務局：稚内中学校）

すべての子どもたちのすこやかな成長のためには、明るく健全な家庭、思いやりと文化の香りがする平和な地域社会、生き生きと楽しく授業がわかる学校が必要条件です。北地区には、この条件を満たす歴史と風土があります。『北地区子ども生き生き宣言』を家庭、学校、地域に根づかせ、温もりのある北地区にしていきたいと思います。

◆地域では大人の責任で子どもを守り、成長させます◆

子どもの命と安全を守るために、知識と力をあわせます
地域の行事や子育ての語り合いを大切にします
近所づきあい、大人同士のつながりを大切にします
「おはよう、ありがとう」のあいさつを広めます
交通ルール、社会のマナーの見本を示します

◆家庭では、子どもがたっぷり愛されている実感をもたせます◆

親子のふれ合い、語り合いで「思いやりの心」を育てます
早寝、早起き、朝食など、リズムのある生活をつくります
あいさつ、礼儀をきちんとしつけます
「迷惑をかけてはならない」ことを日頃から教えます
自分を大切にすると共に、他に迷惑をかけない心を育てます
家事を分担させ、責任感と達成感をもたせます
PTAや町内会活動に参加し、子育ての語り合いをします

◆学校では子どもの居場所や出番を大切にします◆

わかる授業、楽しい学校づくりを進めます

3-1-3 東地区子育て連絡協議会（東小学校、声問小学校、東中学校、7町内会子育て連絡会）

会社員や公務員の家庭が多い地域。公営住宅も多い。持ち家の一軒家が多い地域であったが、近年は小さなアパートも増えてきている。この地区で意図的に進めているのが、東地区3校での力合わせ。中学校1校と小学校2校。このうち一つの小学校は、規模が小さい。小中連携から一貫へ。実践地域として市に指定されている。学校間のつながりが密になってきている。例えば、3校のPTAがそろって交流会、食事会、交流懇親会を開いている。最近開かれた交流懇親会には、30数名集まった。東地区子育て教育懇談会は、東地区独自の取り組みである。教育懇談会では中学生が提言を行い、PTAや地域組織の役員などの前で発表する。その後、グループに分かれお互いの意見交換を行う。7月にサマーフェスティバルを行っており、今年で20回目を迎える。東地区の3校交流は、30年におよぶ歴史があるのではないかとされている。次に中学へ来る小学生を知るといことで交流が行われてきたという。子育て支援のネットワーク会議を月一回開いている（はじめたのは平成20年）。参加者は、民生児童委員や主任児童委員、校長、指導部長、SSWなど。SSWは常駐しており、地域住民（母親）が担っている。学校の中だけでは解決できない課題に対応。3校の教員同士が顔を合わせる機会が多く、分掌部長ごとの会議も行っている。小規模校であっても連携によって各校の子どもも交流が行われており、規模の課題をカバーできる仕組みになっているのが大きな特徴。地域のお祭りは、町内ごとに子どもみこしをだしている。祭りや連協のサマーフェスティバルには、教師も地域ごとに担当として配置されているので、地域住民と一緒に準備段階から関わっている。東地区の育成会は、東地区と潮見が丘地区が人口増で分割される前の東部地区という単位でも活動している。東部地区としての活動の歴史は古く、現在も東部地区育成会のメンバーは誇りをもって行事を運営している。子育て連協の会長は、この地区の子育て運動のキーマンとして力を発揮している。会長が住む町内では、町内会独自の子育て学習会が開かれ、親の学びの場づくりに力を注いでいる。【特徴：小中一貫教育研究推進実践地区、小・小連携は統廃合課題を切り崩す教育実践の可能性、東部地区子ども育成連絡会活動も盛ん】

3-1-4 潮見が丘地区子育て連絡協議会（潮見が丘小学校、潮見が丘中学校、4町内会子育て連絡会）

文教地区。住宅街のため会社員や公務員が多い地域。保・幼・小・中・高・大がある。大学と中学の交流が盛んである。長期休業中に行っている自主学習の時間に大学生が来校し、中学生の学習をサポートしている。中学校の行事の手伝いにも来ている。また、中学校の教員が大学に出向き講義をすることもあるという。小中の連携も行っている。文科省の学力フロンティア指定を受けたこともあり、学力の部分でも連携している。小中の教員は、お互いの授業を公開研という形で見学し合っている。公開研には、地域の人や大学の教員にもきてもらっている。小中合同の評議委員会も年3回行っている。平成16年に市内では最も早く生徒支援ネットワークを立ち上げている。不登校の生徒への対応等でネットワークが機能している。中学校のPTA総会は、100人ほど集まる。父親の会もあり、活発に活動している。古紙回収、学校菜園づくり、アイスキャンドル・サマーキャンドルの設置や地域のサマーフェスティバルでは父親の会として出店もしている。PTAを卒業した後も学校の応援団として関わる父親も少なくない。父親の会のOB会も組織されている。潮見が丘地区子育て連絡協議会独自の取り組みとして、あいさつ運動を行っている。旗をつくり地域に立てている。

新興住宅地であるため、旧市街地のように数多くの町内会が組織されているわけではない。数千人規模の町内会もあり、地域のつながりづくりのために育成部長らが精力的に行事を行い、子ども・親・教師・地域住民のつながりづくりに力を注いでいる。【特徴：新興住宅地、小中連携公開研修会、大学との連携活動、父親の会、あいさつ運動、PTA の OB は学校応援団】

以上のように同じ稚内市内であってもその地区ごとに特徴があり、子育て運動も地区ごとに独自の展開がある。

4、 稚内市4地区における父親（リーダー層）の学びと組織づくり

4 地区において、2009 年 6 月から 2010 年 8 月にかけて、以下の 21 名の父親に聞き取り調査を行った。

	PTA 役員経験のあるリーダー層の父親	各地区子育て連絡協議会のリーダー層、町内会、子ども育成会のリーダー層の父親
南地区	2名	2名
北地区	3名	3名
東地区	2名	3名
潮見が丘地区	2名	4名

今回分析対象とする南、北、東、潮見各地区は、同じ市街地ではあるものの父親の学びと組織づくりという点では、その形態、展開過程を含め、それぞれ特色がある。以下では、この 4 地区のリーダー層の聞き取りの中から典型的な事例を取り上げ、彼らの学びと組織をみていく。

4-1 南地区における父親の学びと組織づくり Aさん、Bさん

南地区は、1980 年代の子育て運動初期の頃、もっとも活発に親の協同活動が展開された地域である。当時、全国的に非行問題が深刻化し、稚内市もまたその課題の克服が大きな課題となっていた。南地区では、子育て運動の組織づくりの中でも特に「地区 PTA」を創設したことが地域子育て協同へと大きく展開する起爆剤となった。それまで学校や学年、学級単位に存在した PTA を町内会という地域組織にリンクさせる形で組織し、同じ地域に住む住民が話し合い、協同して子育てにあたるといったものである。この取り組みによって、南地区は大きく変貌を遂げていくことになる。A さんは、もともと仕事一筋で子育てにはあまり関わってこなかったという。子どもが中学生になり、全国的に非行問題がおこり、A さんの子どもも稚内市に同様に吹き荒れた“荒れの問題”の渦中にいたという。

この時にはじめて PTA 活動に関わっていくこととなる。きっかけは子どもの荒れで地域に迷惑をかけているのではないかという思いと地区 PTA を創設した当時の校長との関わりだった。その中で地区 PTA 委員長を引き受けていくことになる。校長をはじめとした教師との交流が子育て運動の意義を理解する第 1 歩となった。

「地域組織の分担としては町内の育成会は行事を担当し、地区 PTA は子どもがどんなことで悩んでいるのか、それを解決するにはどうしたらいいのかを話し合うという形でした。地区 PTA の活動では、父親懇談会を開いたり、お茶の間懇談会を何度も開いてお互いの子育ての悩みを話し合いました。船乗りが多い地域ですが、お父さんたちは何とか時間をつくって集まってきてくれたものです」

この地区 PTA 活動に積極的に取り組んだ Aさんは、地区 PTA 独自の機関誌を 1986 年に創刊した。地域の子どもの様子や卒業する子ども達の文集を掲載したり、子育てに力を注ぐ父親や地域住民を紙面で取り上げ激励してきた。こういった活動により、地区 PTA が次の世代へと伝達されることが目指された。しかし、当時とは子育て課題や親の置かれている状況などが異なっていることに加え、少子化の進展などもあり、この機関誌は 2006 年をもって廃刊となった。創刊当時、盛んに行われていた父親や母親の子育てに関わる懇談会も次第に形骸化していったという。初期の頃は、父親子育て懇談会でどのような事が話し合われていたのかを機関誌で丁寧に文章化していたが、時を経ると共に、懇談会を行った事実だけが掲載されるようになった。漁業関係者が多数居住していた 1980 年当時と現在では、産業も変化し、親たちの仕事、働き方も多様化している。また、労働環境も年々厳しさを増しており、その中で、地区 PTA の活動を担っていくことは容易なことではない。現在、A さんをはじめとした子育て運動第 1 世代の子どもたちが子育て運動第 2 世代となり、PTA 活動の担い手となりつつある。南地区の子育て運動は、どのように継承されているのだろうか。

A さんの長男である B さんは、現在小学生の子ども二人の父親となっている。同じ南地区に住み、PTA 役員、育成部の役員、地域のスポーツ指導などに力を注いでいる。以下は B さんの語りである。

「私の父親が PTA 活動を始めた頃は、今さら父親が PTA 活動なんて…、と思っていました。両親共に仕事が忙しく、随分さびしい思いをしました。自分がこうなる前に（非行に走る前に）できなかったのかと思っていました。自分に関心をもってもらいたくて非行に走った面もありました。父親になったいまは、高校時代からラグビーをしているので、地域の子どもたちに指導をしています。仕事のつながりで PTA の役員を頼まれ、幼稚園、小学校と PTA 活動を続けています。町内の育成部長も務めています。ラグビーを子ども達に教えているとまちなかであっても「先生～」と声をかけてくれます。それがうれしいですね。私は中学の頃、親や地域の大人たちに随分怒られました。怒られた分、悪いことをした子どもにどう怒ればかれらに響くのかわかります。自分の子どもでなくても悪いことをしたらしっかり怒ります。私の住んでいる地区は子どもが少なくなり行事もままならない状態です。育成部も地区 PTA も担い手が少なくいろいろ掛け持ちをしている状態です。私が地域の子育てに関わる活動をしているのは父親の姿をみて育ったからなのかどうか、自分ではわかりませんが、こういうことはとても大事なことであると思っています」

自らの親世代が行ってきた「子育て運動」の様々な取り組みを間近にみて育った子ども世代。彼らが親となった今、A さんのように地域の子育て活動、PTA 活動に力を注ぐ親たちが存在する。「子育て運動」は、次世代へも受け継がれていることは地域住民、教師の聞き取り調査からも明らかとなっている。しかし、1980 年代のような地域ぐるみの取り組みと比較した場合、低迷していることは否めない。

20 年前に非行克服という共通課題があった時期には、地区 PTA は機能していたが、生徒らが落ち着きを取り戻し、比較的目に見えやすい課題がない状態の今、地区 PTA は必ずしも当時のように機能していない。地区 PTA の再生が南地区の子育て運動の課題であることは意識されているがその方策はまだ見いだせていないといえる。南地区の子育て運動は、地区別 PTA が大きな特色である。親と教師がタッグを組んでつくり上げてきたこの地区別 PTA の再生が現段階の大きな課題といえる。南地区の父親にとっても地区別 PTA という財産をどう再生させるかが重要な課題となっている。地区別 PTA の今後のあり方が南地区の子育て運動再生のカギとなるだろう。地域組織として、父親の学びの場としてこの先どう展開すべきなのか模索が続いている。

4-2 北地区における父親の学びと組織づくり Cさん、Dさん

北地区は、旧市街地であるため、市内では歴史のある地域として位置づいている。地域に誇りを持った住民が多く、いわゆる“地域の名士が住むところ”と北地区を表現する住民もいる。旧市街地であるため、自営業を営み代々住み続ける住民が多い。しかし、商店街にはシャッターが下りたまの店舗も少なくなく、地域産業である水産業も厳しい状況で推移しており、道内の過疎地域同様にまちの活性化は大きな課題となっている。現代社会の地域課題である少子高齢化が市内でも特に急速に進んでいる地域でもあり、課題として意識されている。例えば、少子化により町内会の子ども育成部の行事が大きく変化している。子どもの数が多かった時代には、町内会ごとに野球チームをつくり、対抗戦を行っていたという。しかし、現在はチームを編成するだけの人数を集めることそのものが難しくなっている。子ども神輿の担ぎ手も 7～8 年前に比べ半減している町内会もある。

また、市内全体の傾向であるが、北地区でも就学援助を受ける家庭が増加している。一人親家庭も増加傾向にあり、子どもが一人で夜間の留守番をせざるを得ない状況もみられるという。労働環境の厳しさも強まり、年々、親同士のつながりが薄れがちになっていることも意識されている。だが、旧市街地であり、歴史があるため、わが子だけでなく、この地域の子ども全部を育てようという意識が強く、子育てが終わった世代の住民も教育に関わる講演会を聴くために足を運ぶことも珍しくない。地域で学校を応援する力が大きく、学校に対する希望も多く寄せられる。「行事で頑張れ、生活で頑張れ」と、エールをおくる住民のより地域にしたいという思いは強く、これらは、①町内会の伝統 ②子ども育成部の歴史 ③経済活動、地域活動、学校に関わる活動の結び付きが強いこと等がその要因として挙げられる。つまり、地域の活性化は、経済活動の担い手、後継者の育成と切り離せないものであることが意識されているのだ。

①～③について詳述するならば、①町内会の伝統～稚内市では最も早くから拓けていた地域であり、商業活動の拠点として栄えた歴史がある。そのため町内会活動が盛んである、②子ども育成部の活動は 50 年余りの歴史がある。子どもの数が多く、漁業が盛んで活気に満ちていた頃は、町内会ごとに特色のある活動が展開していた。子どもの野球チーム、下の句カルタ、神輿、ラジオ体操、七夕の行事等等。当時は町内会の子ども会だけでチームができるほど、子どもがたくさん住んでいた。恵比須町内会の、子ども神輿は 10 年前には 150 人の子どもの担ぎ手がいたが、今では半数の 70～80 人程度になっている。同じく北地区の

北栄町内会は10年前に50人ほどいた子ども数が半減している。③現在、小中学校のPTA役員や子育て連絡協議会役員の担い手には、旧市街地であり、伝統があり、経営者、自営業者が多い北地区ならではの特徴がみえる。それは、例えば海洋少年団の先輩からの勧誘で青年会議所（JC）に関わり、その青年会議所の先輩の推薦、紹介でPTA活動に関わっていくというルートである。北地区で生まれ育ち、成人後も親の仕事の後継者として地域に根ざして暮らす住民が多い地区の場合、幼小の頃から親しんだ先輩が子育て運動という地域文化、つまり子育て協同活動の意義を伝えていく流れがみてとれる。

北地区の典型例として会社役員のCさんと自営業のDさんを取り上げる。Cさんは、少年団活動、青年期のJC活動、壮年期の経済活動に関わる協同活動といった長いスパンでの人的繋がりがあり、後にPTA活動、子育て運動へとつながっている。

Cさんは地元の出身で、子ども時代は町内会のイベントや海洋少年団に参加して育ってきた。子どもが生まれてからは、海洋少年団の先輩や青年会議所の先輩から勧められ、PTA活動を始める。このPTA活動を通し、「先生方の頑張りが見えましたし、子ども達の頑張りも見えました」。それが、CさんのPTA活動の原動力になったという。また、PTA活動、子育て運動を通し、自己の子育てを振り返る機会も得ていると語る。「子どもが5人います。上は19歳の大学生から下は5歳まで。子育てではいっぱい失敗をしています（笑）。他人の子どもは褒められるのに自分の子どもは褒めづらい。しかし、いろんな先生のお話し（子育ての講演会）や日常的に関わる校長先生、いろいろな父親との交流の中で、なるほどと思うことが多いです」また、子育て運動の取り組みとして、市内中心部の4中学校の校長、教頭、PTA会長で意見交換会を開いていることや4つの中学と5つの小学校のPTA役員が交流会を開き、それぞれの地域のPTA活動や子育て運動を「自慢し合っている」関わり合いも高く評価している。Cさんは、「ふるさと大使」として、観光振興にも力を注いでいる。建設会社を営むCさんは、子育て運動に関わる活動と地域の活性化に関わる活動を切り離せないものとしてとらえているという。自分の住んでいるまちの未来に対して、常に積極的な姿勢といえる。後継者の育成、地域の活性化と子どもの育ちは切り離せないものであることを実感しているためであろう。また、この地区の特徴として地域住民が教師を激励し育ててきたという側面も見逃せない。

Dさんは、20代のころに青少年体験学習会のボランティアとして子どもに関わり、子どもと一緒に活動することが好きであることを自覚してくことになったという。青年会議所での活動も行い、地域での協同活動を展開した。その後、30代後半で子どもを授かり、青年期の活動の経験の流れで幼稚園のPTA活動に関わり、JCの先輩であるAさんに声をかけられ小学校のPTA役員にも就くこととなった。その後、町内会の育成部長にも就任する。Cさん、Dさんともに、学校と関わる中で、教員のがんばり、児童・生徒の頑張りが見えてきたという。「自分育ち、子どもと一緒に親も育っていかないと、と思っています。子育てはおやじも一緒になって教育しながら、おやじも育っていく。おやじたちは真面目ですよ。学年ごとに集まったら、子どものことをみんな話します。悩み事も話します。子どもと一緒にって行事をつくりあげていることも大きいですね。行事などを通して子育て運動にかかわっていると地域の人たちと交流しながら、代々応援してくれていることがわかります。行

事は地域の皆さんに招待状を出します。我々にとって、北地区のフェスティバルをはじめとした子育て活動、子育て運動は普通になっています。当たり前になっています。維持しているというより普通になっています。この地区にいてびっくりするのは、子育てが終わった人でも子育てに関わる講演会や学習会に聞きにきてくれることです。元々、PTAに関わるきっかけは、青年会議所に入っていて、子ども達と活動を共にする行事があり、それがとても好きだったんです。その後、娘が生まれ、娘や娘の友達がかわいくて、幼稚園の頃からPTAに関わっていました。小学校では、Cさんに声をかけられ、副会長を3年、会長を3年経験しています。北地区の先生方はつながりが密なんですよ。先生方はそれぞれ町内会担当もあり大変ですが、PTAのつながりもあります。こういったPTAのつながりや先生がたとつながる中で思うことは、子どもの子育てではなく、親が子どもを教育するためのスキルが問題だということです。親の教育を町内なり、PTAなりでやらなければならないと思います。私自身、地区委員のお父さんたちと交流をもったり、町内の子どもに関わる行事を大切にしています」Dさんは、地域の子育て活動を通し、親が親として育つことが現代的な課題であると認識し、積極的に実践を展開している。

北地区の父親は、自身が子どもの頃に活発な町内会活動によって地域の子も同士、子どもと大人の交流を数多く経験している。そして、地域住民は、地域ぐるみで子育てを盛り立てる取り組みが重要であることを理解している。また、成人してからは、JCや地元商店会などのつながりがPTA活動や子育て運動を支える人的交流として大きな役割を果たしている。さらに、教員に対しては、地域の人が応援する、あるいは育てるものという意識もみられ、教師と父親たちの関係も密である。これらの経験ゆえに地域の父親同士の交流も組織をつくり積極的に取り組む姿勢が生まれたといえる。以上のように親、教師、地域住民の育ち合いが地域の自治組織、経済組織と結びつきながら根付いているといえるのが北地区子育て運動の特徴だ。

4-3 東地区における父親の学びと組織づくり Eさん

東地区は住宅街として発展してきた地域である。東地区の学校の取り組みとしては、小学校2校と中学校1校の3校の力合わせや小中一貫教育、小小連携、小中連携、3校交流会、SSW、子育て支援ネットワーク活動などが特徴だ。東地区PTAの取り組みとしては、3校の教員だけでなく、PTAの交流も深まっている点があげられる。3校のPTAが揃って行う交流会（食事会）には、30数名が参加するほどの規模となっている。また、2010年度、小学校のPTA役員である父親を中心に親父の会を立ち上げている。呼びかけた父親は、子どもが幼稚園時代に保護者向け学習会に参加したことをきっかけにPTA活動に関わったという。学習会や当時の園長先生との交流を通じて父親が子育てに関わることの意義を知っていったという。東地区は、子育て連絡協議会の会長が、みずから居住する町内会で独自の子育て学習会を企画・運営している点も特徴だ。なぜ学習会を行うに至ったのか。会長は旅行代理店の仕事をしていた時に教員との交流などを通し、学校の状況、子どもたちの置かれている厳しい環境を知り、親も地域の住民も学ぶ必要があることを実感していったという。毎年開催されている学習会は、町内の母親、父親、地域住民数十名が参加する地域行事として定着している。東部地区の育成会が、独自の子育て交流会を開催している点も特徴だろう。

東地区には、二つの育成会に関わる組織が存在する。ひとつは東地区と潮見が丘地区が分かれる前の地域単位であった東部地区の育成会である。これは現在も継続されており、独自の行事を行っている。東部地区としての歴史があるため、誇りをもって現在も活動が続けているという。一方、潮見が丘地区が分離した後に位置付けられて東地区としても育成会が組織されている。こちらも東地区としての行事を活発に行っている。

東地区の学校と地域子育て組織が協力し、独自に取り組んでいる「子育て教育懇談会」は、子どもが今どんなことを考えているのかわかる機会になっている。中学生が小学生の頃、思っていたことを話す場にもなっており、中学校の教員、親だけでなく、小学校の教員、親、住民にとっても子ども理解の場となっている。「中学生は意気揚々と来ます。前期と後期の生徒会長がまずしゃべり、各テーブルに分かれてからは、大人が中学生を激励する姿勢なので、中学生は喜んで話し、そして帰っていきます」（東小学校校長）。一方、「子育て交流の集い」では、育成部の人と教員が、仕事が終わった後に飲食を伴う交流を行っている。教員と育成部の人がそれぞれ子どもに対する思いを語り合うことが評価されている。育成部にはPTAの父親もいるため、親と教師の相互理解の場ともなっている。

父親Eさんは、東地区育成会の意義をこう語る。「子どもの言うことに耳を傾け、子どもと話ができるようになりました。育成部入る前と後では、子どもたちに対する気持ちも変わりました。4月になると町内の子どもたちに1年の行事を話す機会があるのですが、「あ、（育成部の）おじさんだ」と子どもたちに言われます。うれしいですね。今の親は、つながることの心地よさを分らないまま親になっているのではないのでしょうか。育成部だったから長く続けられたと思います。PTAだと子どもが卒業すると終わりですから。育成部は、もう10年になります。うちの子どもは親がこういうことをやっているとみているんですね。息子も学校でいろいろやっています。高校では生徒会役員をやっているようです。親が言ったわけではないですが―。東地区の育成部には、市の職員もたくさんいます。全市の育成部でおこなっている「トムソーヤー」事業では、東地区からの手伝いが一番多いんですよ。」

住宅街である東地区は、地域住民が独自に地域の子育て組織をつくり、盛り上げてきた歴史がある。独自の「子育て教育懇談会」や「子育て交流の集い」、東部地区育成会、東地区育成会、さらには、町内会独自の「子育て講演会」など住民自らつながりづくりのために新たな取り組みをつくり、知恵を絞っている。北地区のような伝統的な町内会活動、経済活動を通じた人的つながりは少ないが、新たな人的交流の場をつくり補ってきたといえる。こうして、子育て運動として学校と育成部メンバー、そして、東地区連協会長といった人々が地道な活動を積み重ね、独自の実践を生み、市内でも先進的な組織づくりと取り組みを行うに至っているといえる。

4-4 潮見が丘地区における父親の学びと組織づくり Fさん、Gさん

潮見が丘地区は、現在の東地区と合わせて東部地区と呼ばれていた地域である。それが住宅地の広がりとともに分割され、潮見が丘地区となった。新興住宅地であり、中心市街地のような地縁血縁による住民のつながりは少ない。そのため、意識的に住民のつながりづくりが求められている地域ともいえるだろう。住民はサラリーマンや公務員などが比較的多い地

域。潮見が丘地区の教育・子育てに関する特徴は、①小中ともに文科省の学力フロンティアに指定され、教員、PTA、地域住民が子どもの学力向上のために力を注いだ実践があること、②中大連携の実践（地区内に市内唯一の大学がある）③市内ではいち早く、生徒の個別課題に対応すべく、中学校において生徒支援ネットワークを組織したこと④PTA活性化に向けた改革に取り組んだこと⑤中学校において、特に父親の関わりが多く、おやじの会やおやじの会OBが組織されている点⑥各町内の育成部が活発で、地域住民、PTA、教員との連携が密である点⑦潮見が丘地区独自の取り組みとして「あいさつ運動」がある。これは、新しく拓けた地区ゆえに顔の見える関係づくりと声かけ事案などの犯罪を予防する上でも重要な取り組みとして行われている。東地区は、おやじの会が特徴的だが、それを組織した父親Fさんは、以下のような学びによって、意識を変容させていったという。

「潮見が丘中のPTA会長だった方が、同じ業種で知り合いでした。私の会社まできて説得されてPTA副会長になりました。PTA活動はそれまで経験がなく、教育・子育ては女性がやるものだと思っていました。しかし、活動をする中で、わが子、地域子ども達をちゃんと見ていなかったことに気付き、先生や教育にも目が行くようになりました。PTA副会長を経て会長になった時は、子ども目線でやっていこうと思いました。潮見中には長距離を歩くという行事があるのですが、子ども達と一緒に歩いてみたり、中学校のマラソン大会にも参加させてもらいました。仕事もそうですが中途半端にやるのが嫌でしたから、引き受けた以上やってみよう。マラソン大会は、地域の人から中学生がだらけて走っているといったクレームもあったので、私もやってみました。そうすると大変なんですね。走るということは。1年目は、まったくついていけず子ども達に負けてしまいました。2年目は、大会が近付くと日曜日の3時に子どもたちの目につくように町内を走るんです。私が練習している姿を見た子ども達は、特に早く走る子達は、PTA会長を潰せとばかりに頑張るんです。会長がPTA活動を楽しくやっていれば、後に続くPTAの方からも楽しいという言葉が出てくるんです。運動会も子どもと一緒にリレーを走りました。PTAのメンバー、男女半々でリレーにできました。そうすると練習も必要ですから、PTA同士仲良くなって、楽しいんですね。

潮見が丘中では、父親たちが古紙回収を行っています。親同士の会話がどんどんなくなっている社会だと思います。そういう面で古紙回収は親教育という面もあります。この活動は生徒がやっていたものを親が指導する形で行っていた時期もありましたが、お父さんパワーを見てもらおうと父親だけで取り組むことにしました。仕事のつてなどで、何台もトラックを借りてきて、作業を行う父親たち。終わった後は、学校の親父の会の部屋でコーヒーを飲みながらミーティングを行っています。子どものこと、仕事のことなどを話します。父親にとってこういった会話をもちことは大事なことです。今は現役のお父さんと子どもが卒業したOB会のお父さんとで回収作業を行っています。

なぜ、OB会をつくったかという卒業するとPTAも終わってしまいます。この関係が切られるのが辛かったので、OB会を立ち上げました。運動会や学校祭、バザーなどできる範囲でOB会メンバーも関わっています。また、総合学習の一環で、子どもが土と触れ合う機会づくりのお手伝いもしました。おやじの会で土を用意して校舎の近くにトラックで運び、スコップやくわを手にとたくさんの父親たちが作業に汗を流しました。その場でいろんな会話をする楽しさが芽生えてきています。子どもたちは植物や作物を育てる喜びを感じている

ようです。PTA 会長3年、市連P会長を2年務めました。札幌で行われたPTAの全道の集まりで、私のPTA活動の経験をお話ししたこともありました。潮見が丘中はもちろん、稚内のPTA会長と教員は仲が良いと思います。潮見が丘中学校でPTAをする中で、親は先生の応援団なんだという考えになりました。人間だれしも間違える。ささいなことでPTAは先生を攻撃してはいけない。潰してしまうことになります。人をほめる喜びを知らない人が多くなったのかもしれませんが、ここの中学では責めるのではなく、わかってあげようとするPTAの姿勢があると思います。現在は、OB会のメンバーとして地域のアイスキャンドル制作等に取り組み地域の親や住民と交流を深めています」

FさんがPTA会長だった当時の校長は、「中学生になるとどの子も親と距離を置きたくなるものです。Fさんもお子さんから中学校にはあまり来ないでほしいと言われていたようですが、中学のころは誰しもそういった態度をとるものだけれど、実は小さな頃のようにべたべたしてほしくはないけれど、自分のことは気にかけて欲しいと思っているものだという事を伝えました。Fさんが学校に関わるようになって、本当に変わりました」と語る。以上のようにFさんは、①子どもの実態を知る ②教員の姿を通した教育 ③父親同士の活動を通した課題への気付きと「会話（対話）」の必要性の認識、自己と周りの世界を変革するための実践を展開するに至っている。

Gさんは、潮見が丘中学校の元PTA会長。仕事上の付き合いから依頼され、PTA役員を引き受ける。それまでは、子育ては母親のものというイメージだった。PTA会長になってから、長距離を歩く中学校の行事に参加した。子どもたちのことをよく知らないため、理解しようと試みたという。そこで、ゴールに近いある地点で歩くのをあきらめてしまった生徒の存在に気づく。その生徒はのちに不登校となり、GさんとGさんの妻が支えていくことになる。Gさんは、当時の校長が立ち上げた校長室懇談会のメンバーでのちに生徒支援ネットワークとなる組織に関わる。Gさんは、この不登校の生徒Aくんを校長、担任、ボランティアの大学生、Gさんの妻らで連携を取りながら支えていく。まず、GさんはA君の保護者との関係を築くために力を注いだ。その後、妻が親子劇場のボランティアをしていることから、このAくんと舞踊の舞台を見に行くことを提案する。これをきっかけにAくんは、Gさんと定期的に行動を共にすることになっていく。この間、学校では、Aくんの学習を支えるために教師と学生ボランティアが個別指導を行うなど、連携をとりながらAくんを支えていった。数か月の取り組みの後、徐々にAくんは心を開くようになり、登校も可能になっていった。卒業後もGさんとAくんの交流は続いている。Gさんは、時折Aくに連絡をとり、「一緒にドライブをして、たわいのない話をする時間が楽しい」と語る。わが子でもなく、しかもすでに卒業している子どもに対しても心を砕くGさん。稚内の子育て運動を懸命に取り組んできた校長との出会い、その後のPTA活動、地域活動が子ども観、子育て観を大きく変容させたという。それまで、子育ては母親の仕事と考え、仕事にまい進する父親だったと振り返る。地域の様々な人との出会いが生き方を変えたと語り、現在も子どもに関わるボランティアを続けている。また、潮見が丘地区の父親の会OB会にも参加し、協力している。

以上のように潮見が丘地区の子育て運動は、父親の会・OB会と教員のつながりの深さが大きな力となっている。地域の子育て課題に父親たちがこれだけの力を発揮するという事例

は特筆すべき実践だろう。また、新しくつくられた新興住宅街であるため、意識的に地域のつながりづくりを目指す行事も行われている。各町内会の育成部長は、地域のフェスティバル、行事を積極的に行い、父親の会や学校とも密接に連携をとりながら潮見が丘地区の子育て運動を盛り上げている。FさんもGさんもこの地区が新興住宅地であるため、古くから開けている地域のように地域の子どもたちのことを知っているという関係はなかったという。そのため、まず学校へ行き、学校の行事に自ら参加して地域の子どもを知ろうと努力した共通点がある。そして、校長をはじめとした教師たちとの絆を深め、それをベースに地域ぐるみの子育て運動を主体的に盛り上げている。親同士の親睦、親と子の交流だけにとどまらず、不登校など個別の子育て課題にも教師だけでなく、地域住民である父親が力を発揮しているのが潮見が丘地区である。

5、4地区の位置づけと父親の学びに関わる地区組織

以上のリーダー層の聞き取り調査から、各地区別に地区のタイプと子育て運動を担う基礎組織、学校の関わり、父親の学びと組織づくりを以下のように整理した。

	地区の タイプ	子育て運動 を担う地域 基礎組織	子育て運動と学校の関わり	父親の学びに関わる地区組織 (網かけ部分は、各地区独自の取り組み)
南地区	漁師まち、 初期の子育 て運動をけん 引した地域	地区別PTA	・子育て運動の事務局 ・町内会ごとに担当教員を配置 ・子育て（不登校）支援ネットワーク（中学校）～校長がコーディネーター ・南3校研究会（小2校、中1校の教師の合同勉強会）	・地区別PTAの「父親懇談会」，「お茶の間懇談会」～停滞気味 ・80年代～南地区の主要産業である漁業関係でのつながり ・地区別PTA活動による世代間伝達～VTR，機関誌 ・地域フェスティバル ・子育てカレンダー
北地区	中心市街地	町内会、 父親の会	・子育て運動の事務局 ・町内会ごとに担当教員を配置 ・生徒支援ネットワーク～校長がコーディネーター（中学校） ・PTA地区委員会（父親懇談会）	・伝統にもとづく地域活動（町内会，育成会，地域少年団活動など） ・J.C.，商店街などの経済活動にともなう協同活動・人的つながり ・PTA活動，小学校PTA組織である地区委員会（父親懇談会） ・地域フェスティバル ・北地区子育て新聞の発行 ・北地区いきいき宣言 ・北地区子育てカレンダー
東地区	住宅地	育成会	・子育て運動の事務局 ・町内会ごとに担当教員を配置 ・子育て支援ネットワーク～校長がコーディネーター（小学校）， ・父親の会（今年度設立）	・育成会による活発な地域活動 ・PTA活動 ・地域フェスティバル ・子育て新聞「ひがしっこ」の発行（年3回） ・幼稚園でのPTA活動 ・町内会独自の子育て学習会 ・東地区教育懇談会 ・子育て交流の集い
潮見が丘地区	新興住宅地	育成会、 父親の会・ OB会	・子育て運動の事務局 ・町内会ごとに担当教員を配置 ・生徒支援ネットワーク～校長がコーディネーター（中学校） ・父親の会・OB会（中学校）	・育成会による活発な地域活動 ・PTA活動 ・父親の会による父親交流，OB会交流～中学校校内に「父親の会の部屋」を設置…行事の後の交流拠点に ・地域フェスティバル ・子育てカレンダー ・あいさつ運動

6. まとめ

以上のようにひとくちにまちぐるみの子育て運動といっても地区によって組織づくり、学習活動は多様に展開していた。そして、父親の学びという点でも地域特性に応じた展開がみられ、組織づくりも多様であった。4地区の子育て協同の展開と父親の学びと組織づくりは以下のようにまとめることができる。

南地区は、現在、子育て運動が停滞気味である。その理由の一つは、地区別PTAの停滞である。カリスマ的な校長が推進した地区別PTAだが、父親を含めた活動の継続は難しく、現在、立て直しに向け動きだしている。南地区で子育て協同の基盤となる組織は地区別PTAである。しかし、深刻な子育て課題が見えにくい場合、機能しにくくなることがわかった。子育て運動の初期にみられた父親の子育て意識の高まりを継続させることのむずかしさがみえた。とはいえ、再生のためのいくつかの方向性もみえている。2010年度、地域の小中3校で「南3校研究会」を立ち上げ、教師の学び合いが始まっている。親、教師、住民の連携の在り方を再検討すべく動きだしているのだ。今夏は、「南中の未来を語る会」が開催され、中学生が中心となって親、地域住民、教員の語りあいが行われた。南地区のPTAの担い手が子育て運動の第2世代、つまり、子育て運動の初期の頃に中学生だった人が親となり、活躍しつつある。親世代の奮闘を見て育った彼らが新しい時代にあった子育て協同をどう創造していくのか一期待する声は少なくない。

北地区は、旧市街地であり、商業地域、市の中心地として栄え、町内会や経済活動に支えられた人的なつながりが現在も続いている。親、教師、地域住民～歴史的背景に支えられた彼らの協同意識は、少年期から青年期、そして父親となり子育てをする年代へと受け継がれ、学校を核に町内会、子ども会育成会、少年団、青年会議所、商店会など地域組織の様々な人的つながりが父親の子育て、子育て意識の醸成にも大きな影響を及ぼしていることがみてとれた。また、「稚内中 生徒支援ネットワーク」を2010年から「北地区児童生徒支援ネットワーク」とし、北地区の子ども全体を視野に入れた活動に発展しつつある。

東地区は、住宅地として発展してきた地域であるため、住民自らの手で、人と人がつながり合う組織づくりが意識的に行われてきた地区である。北地区のような伝統的、歴史的なつながりが少ない地区特性を補う組織として東地区育成会や東部地区育成会の活動を大切にしてきたといえる。また、地域住民が子育て運動に支えられつつ、自らつくり上げてきた地域に誇りを持ち、町内会独自の「子育ての会」を立ち上げたり、独自の子育て交流会、学習会を展開するに至っている。現役の父親、子育てが終わった父親、高齢者などがそれぞれ力を発揮できる地域になっている。

潮見が丘地区は、新興住宅地である。新しい住民たちは、地域の住民同士、顔が見える関係づくりを可能にする組織づくりを目指し、育成会活動を積極的に行ってきた。また、子育て運動の事務局である学校（校長・教員）を拠点に協同関係を構築する組織づくりにも積極的に取り組んだ。それが父親の会であり、父親の会OB会である。潮見が丘地区独自のあいさつ運動の取り組みも新たな子育て協同を創造する一つとして注目される。

稚内市の子育て運動を事例に地区別特性に注目しながら地域子育て協同～父親の学び、組織づくりを検討してきた。ひとくちに父親の学び、組織づくりといっても多様であり、重層的であった。人口数万人規模の地方都市であっても、地区ごとに展開が異なっていたことは

注目すべき事実である。子育て運動を基盤に据えつつ、地区の特性～産業、地域組織、住民の特徴を捉え、その上で、独自の展開を保障していく仕組みづくりが重要である。4地区では、現在、地域の高齢者（主に男性）によるセーフティーガード事業が活発に行われている。朝夕、道端に立ち、子ども達を見守る高齢者の数は、子どもの数を上回るほど根付いているという。子育ては、その課題が多様化、複雑化しており、母親と教師、一部の専門職だけが担いきれる時代ではなくなっている。「稚内子育て運動」で用いられる表現を借りれば、“地域ぐるみ”で子育てに取り組む時代といえる。そして、地域に住む住民一人一人が主人公となって、知恵を出し合い、学び合い、行動し合うことが求められる。本論は、（その1）として、地区別の父親の学びと組織づくりに焦点をあて、その意義と展開を述べてきた。（その2）では、地区ごとの組織における父親の学びと子育て主体としての意識変容過程を明らかにしていく。さらに、本論は、リーダー層の聞き取り調査という限界がある。稿を改めて、それぞれの地区で展開している組織において実践を展開している父親たちの学びの実際と意識変容の過程を明らかにしていきたい。

注

- ¹ 池上惇『福祉と協同の思想』青木書店、1989年。
- ² 社会教育推進全国協議会編『社会教育・生涯学習ハンドブック』エイデル研究所、2005年。
- ³ 佐藤一子『子どもが育つ地域社会 学校五日制と大人・子どもの共同』東京大学出版会、2002年。
- ⁴ 岸裕司『学校を基地に＜お父さんの＞まちづくり 元気コミュニティ！秋津』太郎次郎社、1999年。
札幌PTA協議会「PTAさっぽろ 75」（2003年）によると、調査時点のデータとして、札幌市内小中学校318校中57校で「おやじの会」といった父親グループが発足しているとしている。だが、立ち上げはしたものの継続して活動を行っているグループは、半数に満たないのではないかと分析している。
- ⁵ 母親の育児不安については、牧野カツ子『「乳幼児をもつ母親の生活と＜育児不安＞」』『家庭教育研究所紀要NO3』、小平記念会、1982年 の研究により、その概念が紹介された。現代的な親の課題・支援については、大日向雅美『「子育て支援が親をだめにする」なんて言わせない』岩波書店、2005年、白井千晶・岡野晶子編著『子育て支援制度と現場』新泉社、2009年、松田茂樹ほか『揺らぐ子育て基盤』勁草書房、2010年を参照。
- ⁶ 吉岡亜希子「父親の子育てグループ活動における学習過程と意識変容」『社会教育研究』第24号、北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室、2006
- ⁷ 鈴木敏正『社会的排除と協同的教育』お茶の水書房、2002年、495頁に示されている「協同」の定義を用いることとする。
- ⁸ 鈴木敏正『地域をつくる学びへの道 転換期に聴くポリフォニー』北樹出版、2000年
鈴木敏正『主体形成の教育学』お茶の水書房、2000年
- ⁹ 坂本光男『子育て・教育を宗谷に学ぶ』大月書店、1990年
横山幸一・坂本光男『宗谷の教育合意運動とは』大月書店、1990年
恒吉紀寿「地域子育て運動の展開構造 ―宗谷の合意運動への自己教育論的接近―」『北海道大学教育学部紀要第61号』、1992年を参照。